



日本語の、その先へ

理事・日本語支援員 井川和子

外国ルーツなど、日本語を母語としない子どもへの日本語教育は、これまで「日本語力を伸ばす」ことに力がそそがれてきました。至極当たり前に思えますが、これは往々にして「その子の日本語力しか見ない」ということになり、そのせいで子どもから学びの機会を奪う可能性があります。これに対し、子どもの持つ複数の言語の力をフル活用した「包括的なことばの力」に注目し、ITも活用して総合的な学びも日本語の力も伸ばしていこう、というのが新しい考え方です。

カパティラン奨学生のAさんは「日本語力」がなかなか伸びない子でした。そのため来日後長期にわたって他の科目の学習も進まず「できない子」と評価され、私が出会った4年前には無口で自己肯定感も低い様子でした。しかし高校入学後、自分のペースに沿った学びで徐々に自信を取り戻し、さらに「包括的なことばの力」を伸ばす授業が取り入れられたこの1年間で、Aさんは自分の持つすべての言葉の力に価値があることを認識し、それらの言語を駆使してコミュニケーションし、学びを深める喜びを経験しました。英語と日本語を併用して行った研究発表では、堂々と自分の考えを述べ、参加者から

の質問にも答ええていました。まさにAさんが「開かれていく」過程でした。高校の先生方をはじめ多くの人に支えられ、無理だと思っていた大学への進学にも挑戦し見事合格しました。経済的な負担を理由に進学に反対していた母親も「この子はほんとに変わったよ！先生ありがとね！」と高校の先生に話し、今はAさんの進学を応援しています。

2023年度から、高校での日本語の学習が「特別の教育課程」という制度で正式な単位として認められるようになりました。「包括的なことばの力」を伸ばす日本語教育もこれからの新しい試みです。この4年間で、私は学校の制度や日本語教育の方針の転換をリアルタイムで経験するとともに、生徒個人の大きな変化を目の当たりにし、自分の考え方も大きく変えられました。「日本語ができない子」ではなく「母語だけでなく日本語もできる可能性のある子」なのだ、という視点の転換が求められているように、外国ルーツの子どもたちを「支援の必要な子ども」というだけでなく「日本社会を豊かにする存在」として応援し、彼らの持つ大きな可能性を伸ばす社会を創っていけるよう、皆様とともにカパティランの働きに関わっていきたいと思います。